

平成26年度第2回（通算第50回）ソフィア発見講座(報告)

実施日 平成26年11月19日（水）18:00～19:20
会場 磐周教育研究所 大会議室

テーマ 「中世以後、遠州灘を襲った巨大地震 ～考古・文献資料から～」

講師 加藤 理文先生（周南中学校・織豊期城郭研究会）

本年度、第2回ソフィア発見講座の講師は、周南中学校 加藤理文先生でした。先生は磐周の磐周の社会科の先生ですが、「(公財)日本城郭協会学術委員会副委員長」、「NPO法人城郭遺産による街づくり監事」等、国内で広く活躍し、共著を含め著書も数多く出版されています。（参加者 70名）

1 はじめの言葉 司会 鈴木一由 教頭（豊田南中）

今回は磐田南高校地学部の顧問の先生や生徒さん6名が参加していることを紹介し、リフレッシュしながらの聴講を呼びかけ開会した。



2 主催者挨拶並びに講師紹介

活動推進委員会委員長 匂坂 滋 校長（東部小）



大変多くの参加者があったことに活動推進委員会の委員長としてまずお礼を述べた。その後、加藤先生の二つの顔を紹介した。

一つ目は社会科の教師の顔、二つ目は城郭の研究、団体の顧問や監事等を務めていて日本でもその方面で名の知れた方という顔である。

御自身も20年前は中学校の社会科の教師であったことを紹介すると共に加藤先生の御活躍にエールを送られた。

3 加藤先生のお話

今から文献資料、考古資料から話を進めていく。あくまで文献資料をもとにした話です。私自身、東日本大震災以後、様々な方面から意見を求められてきたが、その時も文献資料をもとに話をしてきた。



まず、奈良時代の話から。奈良時代、大の浦（後の今之浦）は遠州灘から国府及び国分寺への通路になっていた。今の状態は江戸時代になってから。徳川家康がなぜ遠州に城を作ったか。それは天竜川の脇に浜松があるから。国分寺があるような所は地盤が安定している。

続いて中世の磐田や浅羽について。中世になってくるとだんだん浦が小さくなっていった。明応7年明応地震。三重県津市は津波で大きな被害があった。震度6であったが、文献を見ても浅羽で津波の大きな被害は見当たらなかった。

大きな津波の被害は浜名湖周辺、湖西市周辺である。他は天竜川太田川流域で多くの

山崩れや、菊川流域の軟弱地盤地帯での液状化被害はあったが、津波の大きな被害は文献から確認できなかった。それは遠州灘の地形(急に落ち込む地形)のためである。この地形は、津波の一波が来ても、二波三波は起こりにくい地形である。河口から2キロの本島遺跡(福田)を見ても大きな津波の痕跡は確認できなかった。



次は江戸時代の浅羽や横須賀について。江戸時代はラグーンがまだ残っていた。詳しくは、遠州地方の陣城の移動を見ればよく分かる。かつて二俣は食料や武器の運び入れ地区として非常に大切にされていた。

同様に食料を運び入れるための便利で重要とされていた城は浅羽の馬伏塚城である。それは、そこまでラグーンがあったから。その後、隆起によってラグーンが減少したため馬伏塚城の南にある岡崎の城山に運び入れ、その後は横須賀に城を築き江戸時代中期まで横須賀城は重要視されてきた。横

須賀湊は遠州灘から奥まった所にあり場所も良かった。それらの陣城の移動は武田軍の勢力と大きな関係がある。しかし、横須賀は延宝8年の台風で被害が大きく、特に高潮の被害が大きかった。宝永4年の東南海地震でも横須賀城が大破した。その後は掛塚が遠州の中心となっていった。

東南海地震、慶長地震でも津波の大きな被害はなかった。遠州地方では液状化や地盤沈下の被害は多いが、なぜ津波の大きな被害がないのか。

遠州灘は隆起帯だからである。津波の大きな被害があれば必ず記録が残っているはずだが記録の状況を見る限り、前500年はその記録がない。そのかわり液状化や揺れの被害記録は多い。繰り返すが、浅羽周辺は液状化に弱い地区であるが津波の被害は少なかったと思われる。



昔は地震より台風の高潮、天竜川の洪水が心配であった。天竜川の自然堤防の上に福田や竜洋がある。それだけ天竜川は暴れ天竜であった。

南海トラフの三連動型地震と1707年以降の巨大地震を見ても、巨大地震がいつ起こってもおかしくないのが分かる。ボーリング調査をすれば年代や昔の被害を特定できるが、場所によって様々な表れがある。いろいろな分野の研究を集めて研究を進めていく必要性を感じている。

4 お礼の言葉

活動推進委員会顧問 木村泰子 校長(竜洋中)

地道な、しかも、丁寧な研究を基にした話で、多くの貴重な情報を得ることができたことにまず感謝の意を述べた。

続いて地層や地質はこれからの未来を考えていくうえで大切な情報を教えてくれるものだという事を改めて感じる事ができたという感想を述べた。

最後に加藤さんのような方が身近にいらっしゃることは同じ磐週の教員として誇りに思うと述べられ結びとした。

